T 1A 1
10
(TA84)

沢長術美

小學讀本卷之二

田中義廉 編輯
那珂通高 訂正

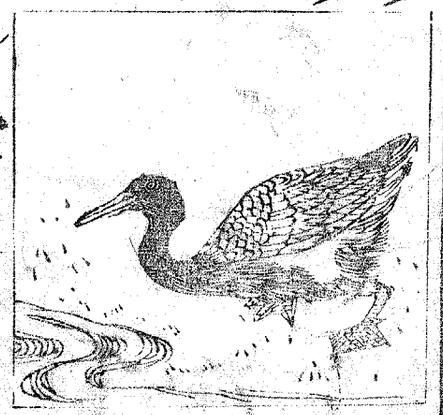
第一

此女兒ハ人形を持てり○汝も人形を好むか○我も甚こきを好めり○此男兒も人形を持てりや○否男兒ハ人形を持たにして、

鞭を持てり、男兒の遊ハ女兒と異なるべきなり」
老たる牝雞、鶩の子を、多く伴へり○此鶩の子ハ、

皆水の中に飛入きり○此鳥ハ、
其性、水上に泳ぐことを、好めり
○牝雞ハ其沈み溺きんことを
恐きて、甚憂ひ悲めり○然きど
も、鶩の子ハ牝雞の心を量り知
らずして、隨意に游べり○牝雞
ハ、何を憂ひ悲むと、思ふや○牝
雞ハ、此鶩の游水鳥なるを、知ら

ずして、我子と思ひ、悲めるなり」
爰に、成長したる鶩なり○鶩の
嘴と、牝雞の嘴より、大にして、其
足に蹼あり、故に、水に入りて、能
く泳くことを、得るなり」



此ハ、何家なるを、知きりや○これを、學校なるへ
し、數多の男女の子、此家に通ふを、以て、知らきた
り○汝ハ小兒の遊歩場に出て、遊ぶを見たり
や○數多の小兒出でて、走るもあり、球を弄ぶも
あり、或ハ、紙鳶を揚げ、或ハ輪を廻して、遊べり

○男兒も、女兒も、學校へ行て、能く勉強すべし○能く勉強したる、後は非きバ遊歩をもるさるとも誠に樂きことハなきものなり」今此子の釣りたる魚ハ鯉あり○汝も魚を釣り得たるときハ、能く心を、用ゐよ釣糸を切らるゝことなるべし○天曇りて、雨少しく降り来

きたり○魚を釣るハ、雨天のときと宜しとせるゆゑ○然り少しく雨降りて風なく、暖かる日を、宜しとす○汝ハ魚を釣るを以て宜しき事と思ふゆゑ○然り魚を、釣りて、食ふるハ、悪しき、事にあらずと雖、釣りたる魚を、弄びて、徒に、捨つるハ、宜しからず」

男兒と、女兒となり○これハ學校へ行く、途中か

り○今急きて學校ゟ行ゟん
と思ふがゆゑゟ男兒ハ女兒
を助けて走きり○此兒等ハ、
學校ゟ行くを樂と思へりや
○然り此兒等ハ其性善きも
のゟきべ學校ゟ行きて學問
することを第一の樂と思ふなり」

此馬ハ柔和ゟる馬ゆゑゟ二人の小兒を乘せて歩
めり○此馬を走ゟと思ふゟ○此馬の前の一足
を擧げてあとの一足を下さんとすると見きべ

走ゟはハならぢ徐ゟ歩
むあり○前の小兒ハ手
綱を、両手ゟ持ちたきと
も、其見ゆるハ只右の手
のみあり○後の小兒ハ
馬より落つることを恐
るゝゆゑゟ前の小兒を、
抱きてをきり」

此處ハ工人の作事場あり○數多の大人ハ作事
を事とせり○二人の小兒ハ、此作事場ゟ来り板

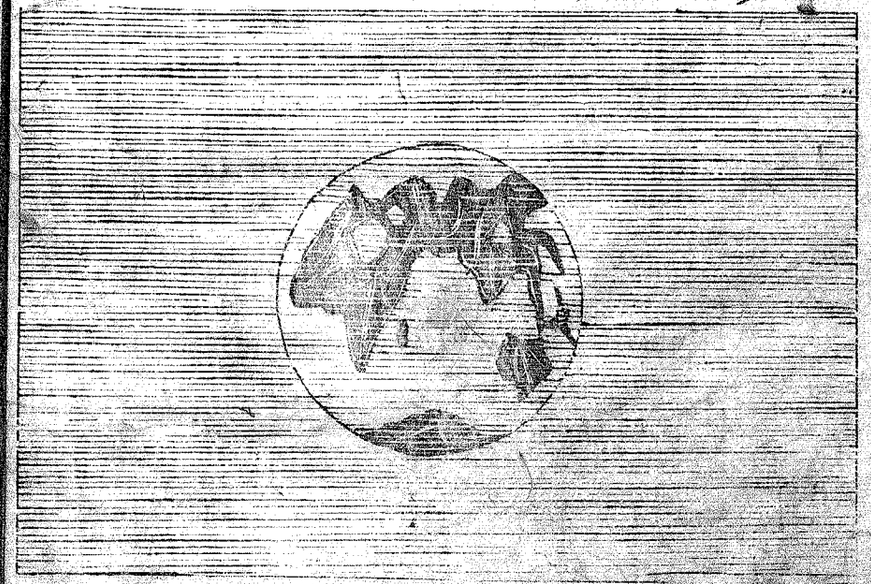
よ乗りて、遊び戯れ居れり、一人の小兒は高く上のり、一人は低く下のりたり○汝は小兒の傍なる器を何ありと思ふや○ときは斧と鋸なり○汝は此小兒等を善き小兒と思ふか○作事場に来りて遊ぶは善き小兒なれ、はなはだざるべし○今は遊歩まべき時間と

は見えば學問まべき時間なり○學問まべき時間に作事場に来りて、遊び戯れ作事の妨をまるは、必なはしき小兒なり○汝等は遊歩のときも作事場に来るべからず遊歩場にて遊ぶべし

第二

我等の住居まる世界は、平なるものにあらず實は圓くして、球の如きものなり故に世界を地球といふ○此世界は静なるやうに覚ゆれども實は動くものにて、毎日一廻づゝ旋りて一年まは太陽の周りを、一旋りまるものなり○太陽は圓

きものゝて、世界は光と熱とを與ふるものあり○我等晝は太陽を見きども、夜は見ることあゝ○汝、夜の太陽を見ることを得ざるは、何ゆゑかるを知きりや○夜は、太陽の方ゝ向たざるゆゑに、見ることを得ざるかり○月も、亦圓きものかきども太陽及地球の如くは大あゝ○月は、原より光なきものかきとも、太陽の光を受けて、始めて輝くものあり」

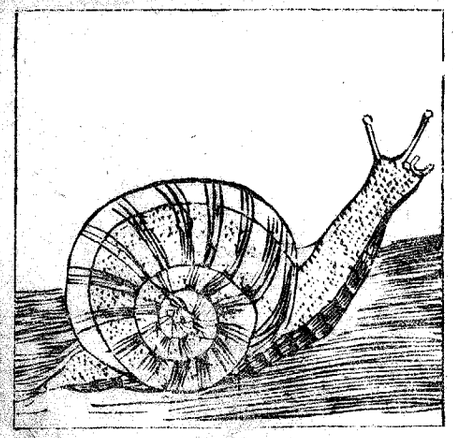


我等一同は草刈場ゝ出来きり○小兒は刈りたる草の上ゝ坐ゝ居て、草を刈るを觀る○枯草は、柔かるる物かきゝば、此上へ遊び戯るゝゝ宜しきかり○草は、牛馬の食あり、

ゆゑに牛馬を畜ふ家まそ、夏の間に刈りてこ
きを貯ふ

狐は犬に似たる獣にして、頭平に鼻と耳とは尖りて、尾は甚長し○此獣は穴の中に住し、晝は隠れて出でず夜に入れば穴より出でて田畠の傍を遊行し○狐は食を貪る獣にして多く雞の雛を食ひ又好んで桑

の實、櫻の實等を食ふ○雞を捕ふれば穴に持ち行きてこれを食ふ○もし犬を見るときは穴の中に逃げ入りて出づることあり、是は穴に入らざれば直に犬に噛み殺さるゝ故なり」



蝸牛といふ蟲は足なきゆゑに歩むこと能はず只匍匐するのみなり

この蟲は背の上に殼ありて物に恐るゝときは其中に縮み入る○蝸牛の動くときは四本の角を出だし其中二本の長き角

の先きに目あり、短き角の下に口あり○此蟲は、冬は、土の中に伏し、春の至るを待ちて出づるあり

汝ら、此處に男兎と女兎と驢馬の在るを見たりや○男兎は、驢馬に乗らんとす○何如に、汝ら乗り易かるべしと思ふや○驢馬は小さき馬なれども小兎には乗り難からるべし○遥の向ひに荷車あり○汝は、此荷車を何ありと思ふや○遠き處ゆゑ、慥に見分くること能はざれども、畠の小路に、ありるを見まじ穀物を載せたる車なるべし」

此圖に画きたるものは、何ありや○大人と小兎と二人、水中に立てり○此等は、何をなすや○此人々は、魚を漁するなり大人の釣りたる魚は、大なるゆゑに強く曳くは、糸の切れんことを恐れて遽に曳き擧げざるなり○男兎の持ちたるものは、何ありと思ふや○そは、網の類なるべし

といふものなり○男兎は、此網を以て魚を捕へ

んとせ○大人の脇ゝ懸けたるハ何あるぞ○こきハ蓋のなる籠ゝて其中ゝ魚を入るゝなり○此人の立ちたる處ハ深しと思ふゝ○人の膝まで水ゝ入らざるを見きべ甚深ゝ〜べもし深水あきハ二人とも立つこと能ゝさるべし○此河

ゝ架したる橋なり汝ハ此橋ハ何ゝて造りたると思ふそ○橋ゝハ木と石と鐵との別ハなきもこきハ木にて造りたる橋なり汝ハ此男兒を何歳許ありと思ふや○此男兒ハ十歳以上あり○此男兒ハ善き人ありと思ふゝ○吾學問をもせべ又遊歩をもあさびして休みをるゆゑに忘りものと、

知らるゝあり○此男兒は何を倚りて何を見るや○此男兒の倚りたるものは大なる石の柱なり又此男兒は何をも見ず只天をあゞむるあり○總て小兒は勉むべき時もあり遊ぶべきときもあり○此小兒の如く常は勉強をおさゞるときは成長の後人は勝ることを得ざるあり」

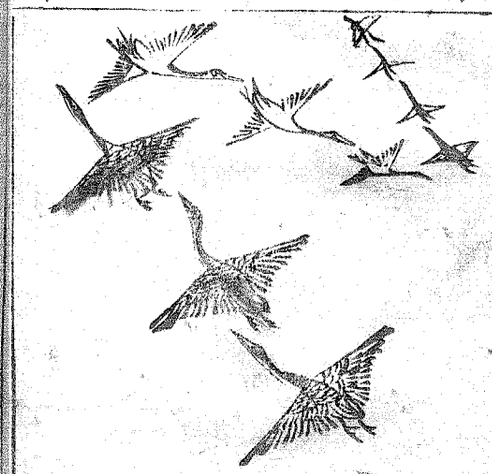
爰は又怠惰の小兒あり○彼は學校へ行くと云ひ乍ら學校へは行かゞして途中を遊ひ居るや○未學校へ行くべき時刻来らゞるや○學校をそは既は稽古始まりたるべし此小兒もく行くべき時刻あり○然らは何ぬる爰は止まり居るや○彼は犬を乘りて又他の怠りものと遊ぶんと思へべあり○彼は學校は行くものあゝべ其書をば何處は置きたるや○書をは自分の家は忘きたるあり○さきべは學校は行きたりとも稽古はることを得ぶ○善き小兒は書を大切はあゝして學校は行

くを好み怠惰の時間来きへ決して途中にて遊ひ居ることなく學校にても能く勉強して學ぶゆゑに其等級屢進むあり

第三

雁の列をなして行く圖

なり○見るべし一羽の雁導をなせば其他の雁ついきまに隨ひて飛行くと○是を何處に行くや○或ハ水邊に行きて葦



の間に息み或ハ田に下りて食物を求めんとハるあり

此鳥ハ冬ハ北より南に来り春に至きへ又南より北に歸る故に夏ハ此地に居ることなし

地に生ひ出づる物ハ草と木と殖りて木に灌木と喬木と殖り○草ハ其幹葉一年限りにて枯るゝものなり灌木ハ高一丈に出でぎと雖其幹ハ枯きざるもの

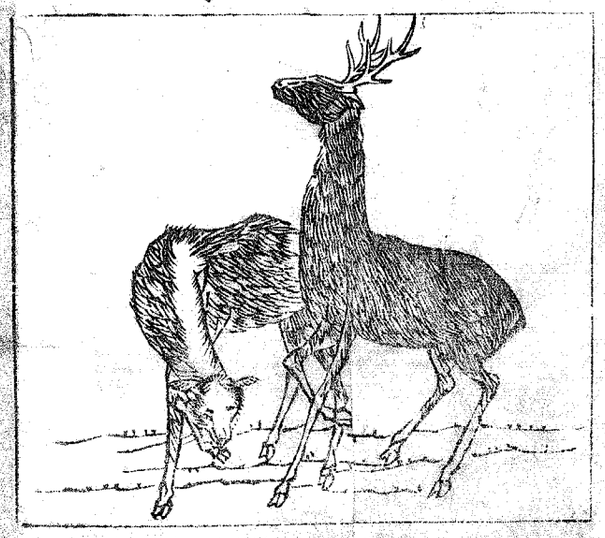
あり○喬木とハ、成長して、高大ニ至るものを云ふ○此三の者を合せて、植物と云ふ植物ハ生を保ちて、能く成長し、又死してハ、枯朽るものなれども、人の如くニ、物を思ふに根ハ、食物を、地下より吸ひ、葉ハ、能く呼吸をれども、鳥獸の如く、動くことなし

鳥ハ、二つの足と、二つの翼ありて、多くハ空中ニ翔る又水上ニ住むものもあり○獸類ハ四足ありて、體ニ長き毛あり○此鳥と獸とハ、身體を意ニ従ひて、動かせども人の如く言ふことと能ハざる

汝ハ、實のる草木の種類を知きりや○其莢を見て、豌豆と蠶豆とを知り、穂の形を見て、稲と麥とを知るべし

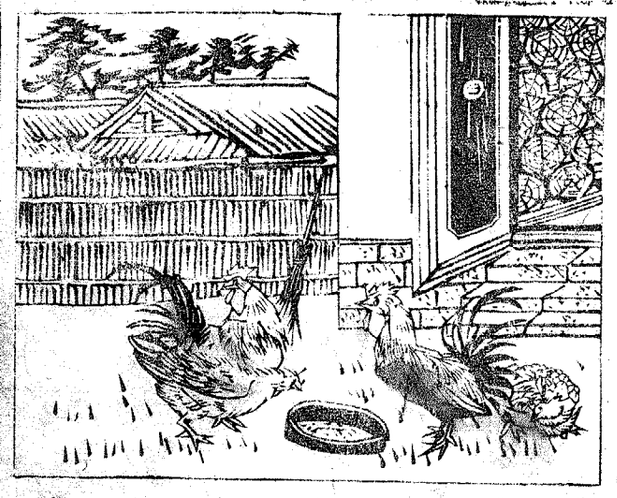
草木ニハ、皆種子あり、豌豆蠶豆ハ、莢の中ニ在りて、梨李、橙ハ、肉の中ニ在り○種子の、食物となるものハ、稲、麥、豆、黍、粟の類なり、肉の、食

物とあるものハ梅桃梨李蜜柑の類なり
草木ハ皆種子より生ぜ濕ひたる土の中ゑ種子
を置くときハ漸ゑ膨脹して遂ゑ破裂し其所よ
り芽と根とを生ずるなり
鹿ハ山林ゑ住する獣なり
この獣の牡ゑハ枝を生ず
たる角あり牝ゑハ角ゑ
其色ハ茶褐色にして白き
班あり
鹿ハ長き足ありて走ること



と甚速なり○常ゑ草木の葉を食とし或ハ田野
に来りて穀物を食することあり此獣の角ハ堅
くして器に造るべく又其皮ハ席とすべし
此男兒ハ惡しき心のものなり汝ハこの男兒の
持てる帽の中にある物を見たるか○これハ栃
の實なり○此栃の實を垣を踰えて隣家より盗
み取きるなり○今此男兒栃の實を盗み取り垣
を踰えて出でんとする所を數多の犬ともこれ
を見て男兒を追ひかけ一匹の犬男兒の裾を咬
へたりよりて男兒ハ垣を踰え去ることを得ず

此時盗みたる柿の實を捨てゝ犬は裾を放つべけ
れども此男兎はこれを捨つること能はず○他人の
物を盗むは決して為まじきことなり善き小兎は自分の物ならざれば
取ることなし○常は行状の正しきものは幸多
く正しからざるものは幸を得ること能はざる
べし汝等他人のものを見て何如あるものなりと
も必これを得んことを欲まることなかれ」



爰に四箇の雞と穀倉とあり○汝ら見る所ふて
はこれのみなりや○否家の後ふ松あり垣は寄
せて立てたる篇あり雞の飲水を入れたる水鉢
あり○汝は此鉢は水ありと
思ふや○必水あるなるべし
○何を以て水のあると知き
るや此鉢を少し傾きて一邊
の縁高く出でたるを以て水
のあるを知きり水は傾きた
る鉢の中にても決して斜ふ

傾くことなく其表面は必一様なる平なるものなり○汝は雞の水を飲むを見しや雞は牛馬の如く首を下げて飲むこと能たべども一滴口に入るべば首を擧げて咽に飲み下だすなり此處は何如なる所なりや○此處は穀倉の傍なるべし雞は巣に上らんとして梯子を傳ひ行くなり、

○梯子は横木なりこれを何なりや此横木は梯子の級なり、

汝は雞の巣を見たるか○巣は隠れて檐の裏なるゆゑ見ることを得ず、

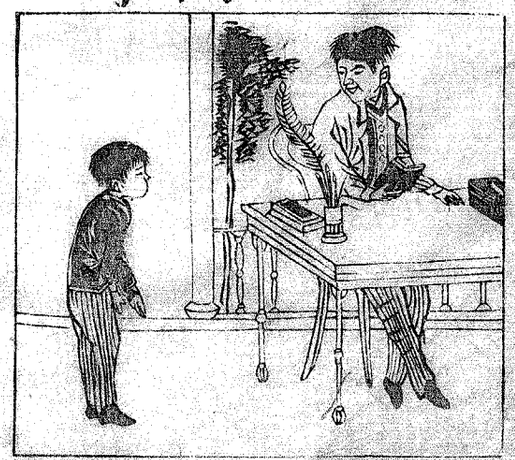
汝此處に来れ汝昨日失ひたる所の書籍を尋ね得たりや○否未尋ね得ず○汝は文庫の中を捜し見ばや○幾度も捜し見たれども其處なし○汝今一度尋ね見よ書籍なくべ學ぶことを能たず

又汝は筆なりや○筆は命せらるたる如く文庫の上に置きたり○汝は筆の用ゐたを知れりや○否未用ゐかたを知らず○汝今其筆を取来

き、汝は筆の用ゐ方を教ふべし、筆の用ゐかたと、知らざるべ字を習ふこと能をば、

汝は、今日、學校は行きたりや

○學校は行き、終日學びて先刻歸り來たり○然らば、座は就きて復讀せよ、凡て學びたる所をは、常は復讀して、決して忘るべからず

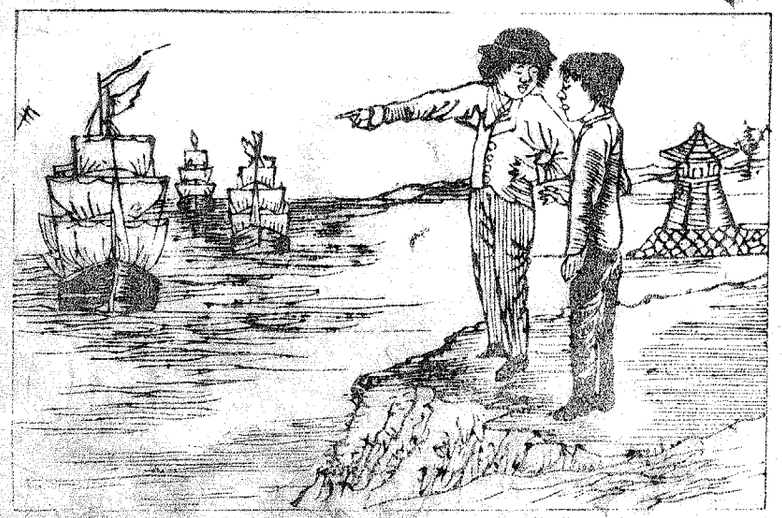


第四

岸の上は、二人の少年ありて三艘の船の岸は着くを見居たり○三艘共は、帆を十分は張りて檣の上は、旗を揚げたる船あり、

一人の少年云ふ、我が朋友は去年先の船は乘りて、外國は往きたりしは、日を數ふるべ、其出立せし日より今日まで、殆一年は及ひて、歸り來たり、

彼の両親は日々、彼の歸る

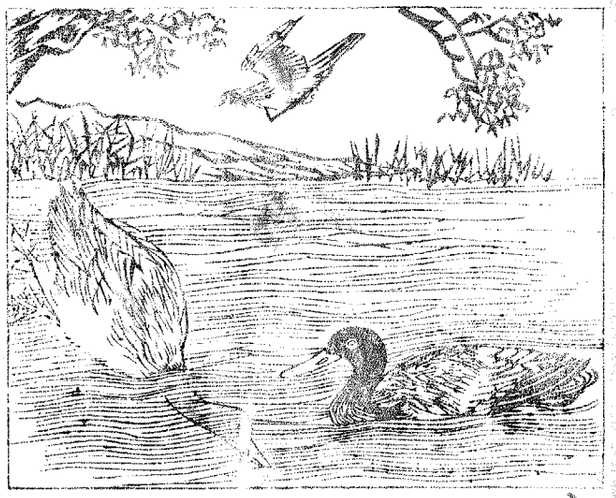


を待てり、○今日無事なる顔を、見ることを得て何カ許リ喜ヒ〳〵かんまた彼男も父母の恵みき顔を見い定めて大ハに喜ぶべー

彼船ハ、堅固なる船にて、風雨に逢ふとも、破損かく、無難に歸り来きゞ船中の人々ハ、皆此船を、恭く思ふべー

人々の、外國に行くハ、學問或ハ、貿易をして、我國の、利益をおさんことを、欲するゆゑなり」

總て鳥ハ、嘴の長きものと、短きものとあり○此嘴にて、食物を啄む○鳥ハ、穀物を、食するものと、魚、又ハ蟲を、食するものとあり○鳥の目ハ、面の、両側にあるゆゑ、一時に、両方を、見ることを、得るなり○林中に、遊ぶ鳥を、林禽といひ、水上に、遊ぶ鳥を、水禽といふ○鳥の足ハ、四指ありて、三指ハ、前一指ハ、後にあり、然れども、啄木鳥類ハ、前後各二指ありて、能く、大木に、上下し、樹皮の中に、住む、蟲を、搜し、食ふ」



此人ハ驚きたる風情なり、是ハ何故ありや○何故あることを知らに、○此人も久しき以前ハ遠方ヨリ行きて今我郷ヨリ帰り来きるに昔住みたりし家の変りたるを見て驚けるなり、

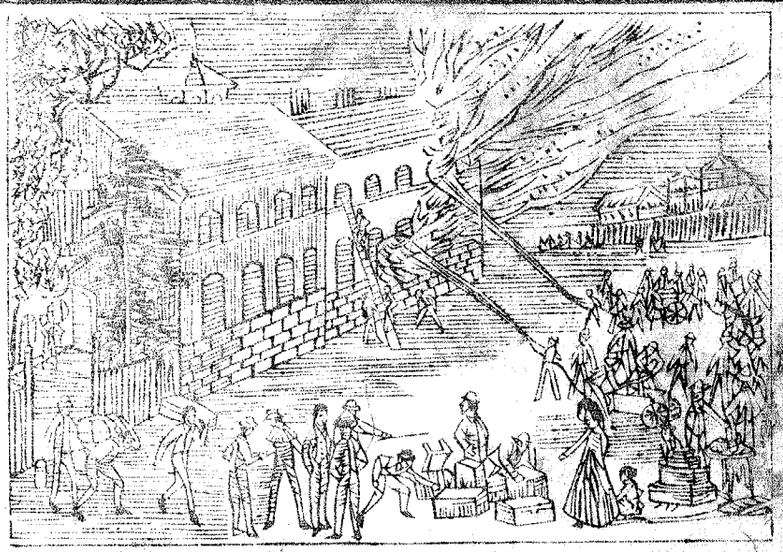
さて此家の斯く変りたる所以を、話し聞こゝにべし、

此人の家を出でたる後近隣ヨリ一人の小兒なり

しが此小兒ハ主りて悪しきものにて、ヨリ日紙ヨリ紙を焼きて遊べるヨリ其火忽家の障子ヨリ燃えつき、終ヨリ此家まで焼け失せたり○さきハ今此人我家ヨリ帰り来りても、未妻子の行きたる所をも知ることを能たゞゆるヨリ悲み歎くなり、

今此人の家の焼けたる時の状を圖して示さん

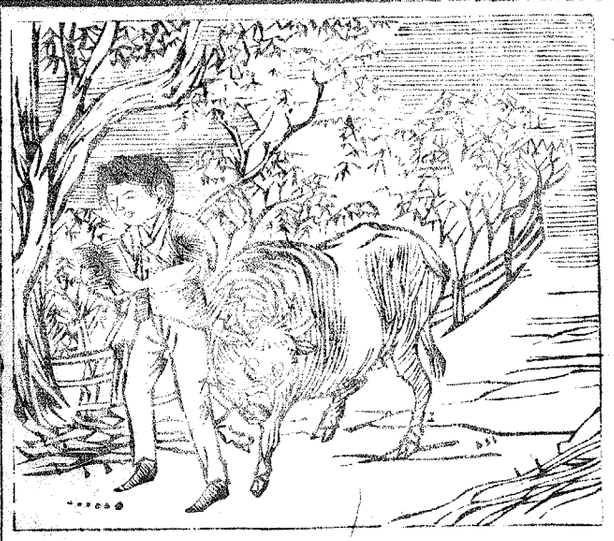
○火と、烟との家の窓ヨリ吹出つる所を見よ○又家ヨリ懸けたる梯子なり○梯子ヨリ上りて火を消さんとする人なり○多くの人ハ、唧筒まで類ヨリ水を注げり、



此圖は画きたるも柔和なる牛にして、此小兒は

然れども、火猶消えずして、家終に焼け落ちたるのみ、この家の人々も皆逃げ去れり

されば、小兒は火を弄ぶへからず、一度過つ時は家をも、倉をも失ひ、甚しきに至りては、其身をも失ふことなるものなり」



隨ひ、徐に歩めり、此小兒は牛を曳き行く所なり、○此小兒は何ゆゑに歩みながら書を讀むや、此小兒は其性極めて賢く、常に學問をすることを好めども、家貧しきゆゑに學校に入ること能はざるにて、日々牧場に行くなり、然れども學問の志深きに因りて、道を行く間も、書を讀むなり、又牧場に至りても、休む間は書を見ざ

ることあり。○此の如き小兒は他日必ず人まさりて貴き人となるべし。

惡しき小兒は日々學校に行くと雖、能く勉強せずして遊ぶことのみを好むゆゑ後には愚なる者となりて貧賤に其身を終るべし」

雲雀巣を麥畠の間に造りて、雛を育てたり。○麥は已に熟して刈るべき時に至りたるに雛は未だ自由に飛ぶこと能はず。一日、親鳥食を求めんとて、飛び去り暮に及びて歸り來れば雛告げて今日、此畠主なる農夫其子と共に來りて明日は近

隣の人を雇ひて此麥を刈り取らんとて歸れり。と云ふ親鳥聞きて彼の近隣の人を雇はんとならべ、未だ急には刈取るべからず。明日は此處にありとも恐るるに足らじと、いひ、其翌日も亦食を求めんとて飛び去りたり

かくて日の暮るゝ比、親鳥歸り來れば雛又告げて今日も農夫其子と共に來りしが、近隣の人も同じ

く已ゝ作りたる麥を刈るに暇ならざれバ、明日ハ、朋友親族を頼ゝて刈り取らんとて歸きりと云ふ、親鳥ハ彼尚他人を頼むの心ならは明日も憂ふるゝ足らじと云へり、

さて其翌日親鳥例の如く飛去りて歸り来るゝ、雛の云ふ今日ハ農夫父子来りてかく麥の熟せるうへハ最早他人の力を待つゝ暇なゝ、明日ハ自刈り取るべーとて歸きりと云へり、

親鳥ハこゝを聞きて然ちバ我等も疾く此處を立ち去るべー農夫ゞ自刈り取らんと決ーたるうへハ必日を延ばべからじとゝいへりとぞ

親鳥の言實ゝ理なり、他人ゝ依りて事を成さんとする者ハ恐るゝゝ足らざれども、自為さんと決する時ハ須臾も猶豫せざるべけきバなり、さきべ人々皆自為さんことを志して、他人の力をバ頼むべゝ〜ゞ

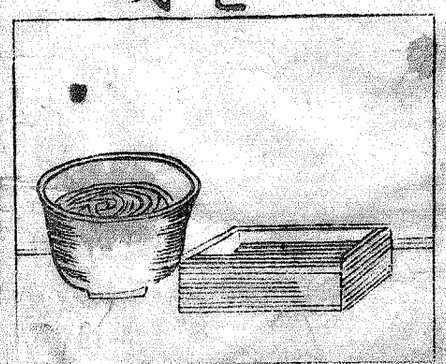
第五

今ゝ花園ゝ善き種子を蒔きて善き植物を生ぜーめ美ーき花を開ゝーめんとするゝ園ゝ蔓き る雜草を抜き取らさるときハ蒔きたる種子を

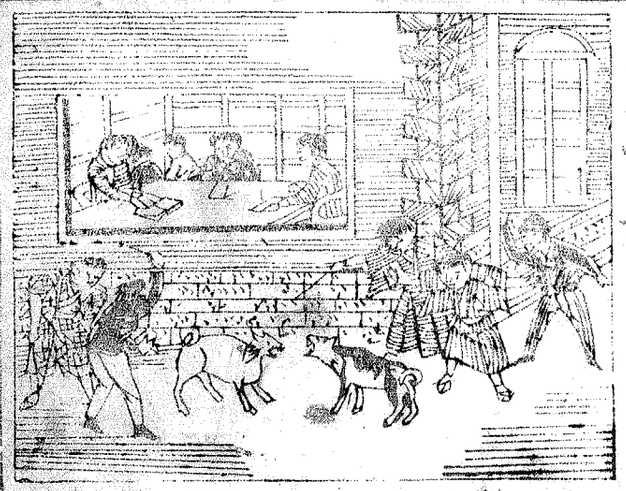
害して、生長すること、能たざるべし
今、此處は花園の雜草を抜き去る圖を出だして
以てこれを示さん、
地は、もとよきものなれども
も、善き種子を、蒔かざれば、
よき植物を生じ、美しき花
を、開くこと能たゞ、又芽既
ふ萌出でたるときは、能く
培養せざれば、生長はけること
と能たゞ、雜草はこれを反

して種子を蒔かざれども、自生長して、これを抜き
去らざれば、大は蔓りて、善き植物を害し、終はこ
れを枯らし盡すに至るべし
人の心はもと、善きものなれども、善き教を聞き
て、これに從ひ、されば善き人と成り難し、教師の
教は、即我心は、種子を蒔くは同じ、故は、心を用ゐ
てこれを育ひ、能く成長せしむべし、然れども、不
正の心の、生じ易きこと、雜草の如くなれば、心は
蒔きたる善き種子を害ずべきものを、勉めてこ
れを抜き去らざるべからず、これを抜

き去ることを怠りて成長せしむるときハ、終ハ中ハ萌せる良心を害してこゝを枯らし盡に
ハ、至るべし
汝等善き人とからんことを欲せバ、此人の雜草
を拔き去るが如く、勉めて、不正の心を拔き去る
べし」
爰ハ圓き器と、四角ある器とハ入
きたる水ハ、もと水ハ、同じけき
ども、其器の形ハ由りて、或圓く或
四角ある、形とあきり



人も小兒の時、此水の如し、善き友ハ交りて、善
きことを見聞けバ善き人となり、又惡しき友ハ、
交りて惡しきことのみを、見聞けバ惡しき人と
なるあり
家の内外ハ、數多の小兒ハ、
て、其遊ぶ戯ざの各異なるを
見るべし、家の内ある小兒ハ
日々學校まで、學ひたる所を
家ハ歸りて、其友と互ハ問答
して、こゝを樂とし、此等ハ他



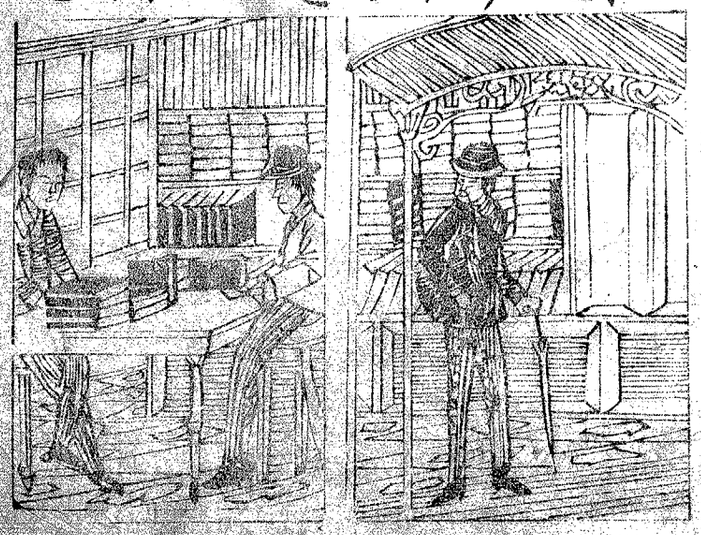
日必賢き人とあるべし又外に集まり遊べる小
兒は學校にも行かざる者と見えて犬を嚙ミ合
せ棒を打揮り無益の遊のことをなせり此等は後
日必愚なるものとなるべし汝等賢き人とあら
んと思ふ能く心を用ゐて常に善き友と交り
必惡しき小兒等と遊ぶべからず」
汝等事の正しからざるを知るときは他
日利なることゝ思ふとも決して行ふべからず
又惡しき業をは假にも心に行はんことを思ふ
べからず若心に行はんことと思ふときは縱令
事には出さずとも既に行ひたるに同しと知る
べし

凡て惡事は虛言より始まるものなり故に虛言は暫
其身に利益なりとも決して虛言にべからず虛
言を以て得たる利益は他人の物を盜みたると
同じく終には其身の害となるべし
むかし一人の男兒ありて毎に狼來たり狼來た
り誰か出でゝ救ひ給へと大に呼びて途を走き
りこたへは眞に狼の來たるにはならば他人の出
來りて救はんとせるときは欺き得たりとて大

は其人を笑ふを以て戯とするあり斯くすること度々ありしーぐある日真に狼来りて此男兎を食ちんとに男兎い大に呼びて狼来きたり救ひ給へといへども誰も亦例の虚言なるべーとて、こきを救ふものあらーしゆゑ終に狼のためにはみ殺されたり故に平生戯にも虚言

と以て人を欺くものハ適真實のことを話すとも信とあたものならざれば常に慎むべきことあるべしや」

此處と何如なる家ありと、思ふに○こきハ書肆なり帽を戴き爰に三人の男なり帽を戴きたる二人の者ハ書籍を買ん〻ためにこの處に来きるなり一人ハ既に一冊の書を購ひ得て去らんと



氏一人を机上の書の、價を定め居るあり
今此二人の書籍を買ふハ、何の為ありや家ゟ
りてこきを理會し己の智識を増さんとにれ、
あり、書かけきバ、智識を増にこと能をゞ智識
きときハ、國の利益を興にこと能をゞ故ゟ志ゟ
る者ハ有用の書とバ、金を惜まゞしてこきを購
ふあり」

此圖の男ハ、手ゟ持てる、書を讀こて、其義を、小兒
ゟ、語り聞こうしむる所あり○汝とこの小兒ハ能く
心を用ゐて、其話を、聞くと思ふ○此小兒ハ心

を用ゐて其話と聞くと見え
て、此男の語ることを深く考
ふるさまあり、思ふゟ今聞く
所ハ此書の中のゞ大切ある
箇條あるべし○凡て教を人
ゟ受る者ハ決して、倦怠の心
を、生ゞべからゞ倦怠の心と
生ずるときハ直ゟ其顔色ゟ見ハるゝゆゑに教
ふる者も亦こきを知りて懇ゟ教訓にることか
しきれバ、教を受る者ハ皆此小兒の如く心を用

ぬて其話を能く考ふべきことなり

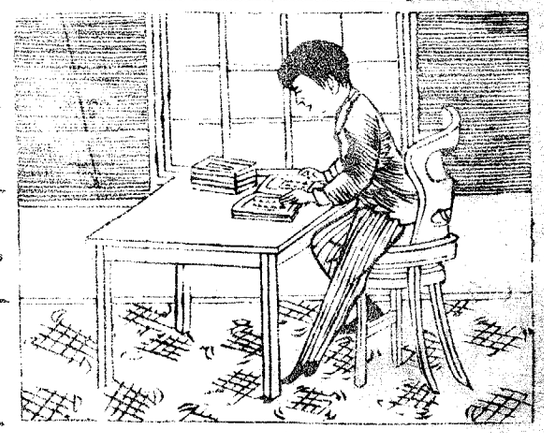
第六

汝ハ猫の兒を愛するか、又犬の兒を愛するか○我ハ猫よりも犬をもとも、其遊び戯るゝ所を見ることを好めり

總て獸類も、稚き時ハ小兒の如く遊び戯るゝことを、好むものなり中にも猫の兒ハ、繩又ハ鞠を弄びて能く戯れ遊ぶなり○然れども獸類も、年老ゆるに及ぶ遊び戯ることを、好まぬ人ハして、年長けたる後までも遊び戯るゝハ、恥づべきことなりとのらばや○さきに、老たる猫を其兒の戯れ遊ぶを見ることを好めども、其身に觸るゝことを、喜びざるあり○老人も小兒の遊ぶを見ることを、好めども、其身に觸るゝことを、喜ハざるものゆゑ、小兒ハ遊び戯るゝとも、老人の身に、觸れ又ハ其椅子、机などに、決して、手を着くべからず」

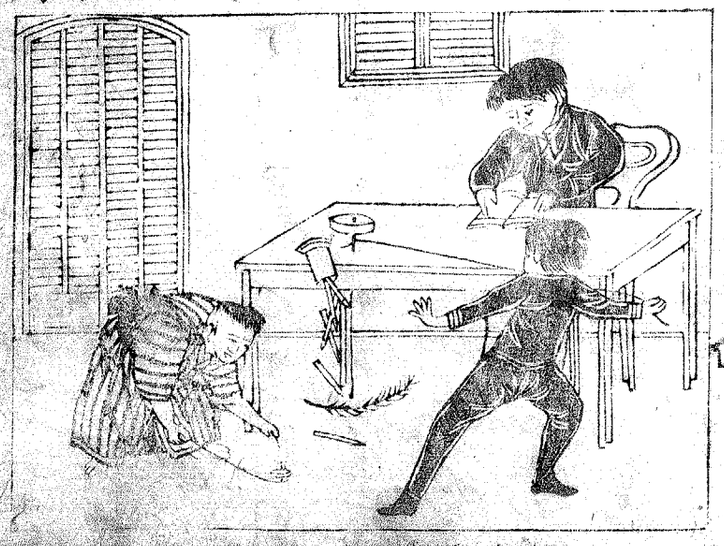
此小兒ハ、學校にて、善き生徒なり○汝ハ、此小兒

の學校まて書を讀むと聞きたり○此頃始めてこゝを聞きたり

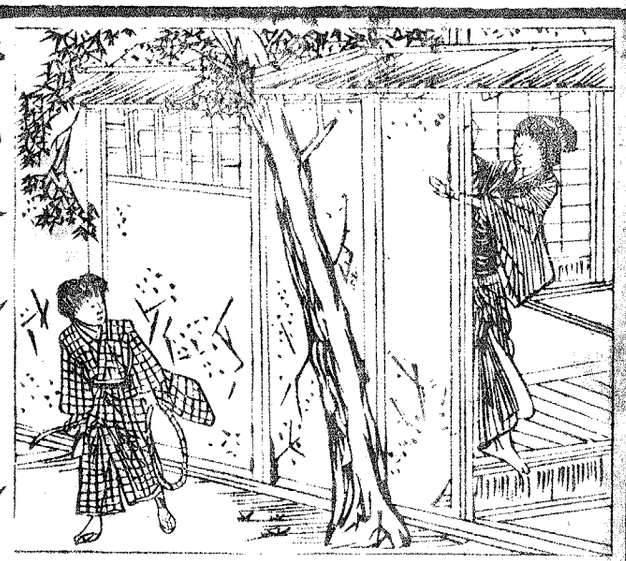


此小兎ハ何の書を讀めるや○彼ハ小學讀本を讀めり○其讀む所の小學讀本ハ何の卷ありや○彼ハ卷の三を讀めり我ハこの小兎の如く能く書を讀むものを好む能く書を讀むものハ、後ハ善き人とおきがあり○若學問もおく智慧もおくハいかでこの善き人とあることを得べき善き人とおることを得されバ他人ハ愛せらるゝことをもおく又貴ばるゝこともあり

愛ハ三人の小兎ありて一人ハ机ハ向ひて書を讀み二人ハ獨樂を廻ハして遊べり獨樂を廻ハして跳り旋るゆゑハ机ハ觸きて其上の筆筒を倒せり書を讀ゝ居たる小兎の心ハ此二人の戯を遊ぶを何如ハ騒



ぐーく思ひ居るあ〜ん定めて此小兒等の仕處
は行ゐんことを願ふあるべー
總て人ハ自好まざることをバ人も亦好まざる
ものと思ひ遊び戯るゝにも決して人の妨とな
るべきことをあんべからぢ又自好むことハ人
も亦好むものと知りてこれをまづ人は讓るべ
しさきべ古き教へにも己の欲せざる所ハ人は
施ことふうれといひ又己達せんと欲せバ人
を達せしめよとも云へり
爰は遊歩に出でんとする小兒あり○汝ハ此小



兒の善きと惡しきとを知
きゝや○我ハ亦其人とあ
りを知らぢと雖今遊歩は
出でんとするに其母は呼
び返されて速は歸り來り
否む色あきを見きハ善き
ものあるべーもし其母は
厭ふ心の色は見ゆるゝを、
此小兒ハ未學校は入らざるか○此小兒ハ五六
呼び返されてこれを
必善きものはゆゝ〜ばと知るべー

歳月過きぬと、見ゆ。未學校は入らざるべし。我が此小兒の學校に入りても、遊歩のこと、好まばして勉めて、書を讀み成長の後も其善き人たるを失わざらんことを願ふなり」

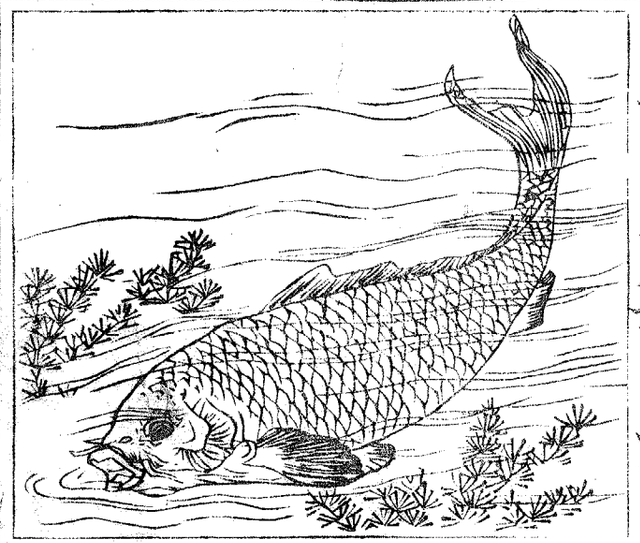
此圖は、画けるハ、何物なりや○こゝハ魚なり

汝ハ生きたる魚を見たるべし○常にこれを見る

汝ハ漁せしことあるべし、何を以て漁せしや○鈎と、糸とを以て魚を釣しことあり

魚ハ、水中に住むものゆゑに水を離るゝときハ其命を保つこと能はず○魚には鰭と尾あり

自由に、水中を游泳し、又全身に、鱗あるあり、鱗きわめて其鱗も魚によりて大小を異にせり、



汝ハ魚の水中にあるときも其目ハよく物を見ると思ふ○然り水中にても、よく物を見るなり○何を以て、水中にても、能く物を見ることを、知るや○水中にて、物を見ること

能はざる時は必岩石に衝き當りて頭を傷くべし然らざるものたよく物を見ることを得きなり

人は水中にて物を見ること今明あるに魚は水中にても甚今明なり

そもそも魚の水中にて能く物を見るは其目人と同じゆゑなり

魚は水中に住み人は空氣中に住むゆゑに人の空氣中にて能く物を見るは魚の水中にて能く物を見るに同し

今この男兄は家を辭して遠行せんとして戸前の階を降りたるゆゑ其妹も階を降りてこれを送り別に臨みて互に言を贈答する所あり

兄曰汝慎みて家を守り能く其身を保つべし火を過つことなかれ病を生ずることなかれ

妹は吾兄寒暑を犯すべからば又久しく他郷に止まるべからずと云ふ

兄、又云ふ、予彼郷に到らば、速に書を以て、安否を報ぜべし、汝も亦其安否を報ぜよ、子が他郷に在る間は、只汝の消息を得るを以て、樂とすべきのみ

汝等此二人を何如なるものと思ふや、○これを同胞の孤あり、孤とは、幼稚のときに、両親を喪ひたるものをいふ

此二人早く、両親を喪ひたるゆゑに、今自身を立てんとはるあり、

今、この男子は遠方へ行きて幾年、妹と相見ることを得ざりしとも、文字を知きるゆゑに、互に書簡を贈答して、其安否を審にすることを得べし

もし此二人文字を知らざれば、何に因りてか音信を通じることを得べき

汝等此二人の事を見て、能く文字を習ひ、勉めて、書簡を作ることを、學ぶべきなり

むかし、ある家に兄弟の小兒あり、兄は七歳にして、弟は五歳なり、○兄は、其才最敏にして、心も亦優しきものなり、弟も、良き性質なきども、尚幼きゆゑに、未世間の事を知らず、輙もすれば過りたる、

挙動をあにことなり、
なる日、兄弟ともに、郊外に出でゝ遊べるにあ
家の籬に小鳥の巣なり親鳥い人の来るに驚き
て飛び去りたり兄弟巣の
中を窺ひ見るに雛三羽あり
弟は悦びて、雛を取りて持ち
帰らんといふと兄いこれを
止めて、親鳥の子を愛するハ、
父母の我等を愛し給ふに同
じ、今汝この雛を取り去らば、

親鳥の悲何如ぞん、若我家に入り来りて我等
兄弟を捕へ去るものなら、父母の悲し給ふこ
と、幾ばくんまして、や雛と、親鳥の養ふ由りて、生
長するものにして、今人の手にかゝりなば決し
て育つことなるべゝ、ばされば今この雛を取
らざるとそ、ふけをと諭しけるば弟も其理に服
して兄の教に隨ひたり
此弟の鳥の雛を取らんとするハ殺生なるにを
非まども其理を論されずかくの如しまして無
益に殺生をやの

されバ縱小き蟲たりとも、無益ゟ殺ゝべからゞ
世の理と、知らざる者ハ、小き蟲を殺ゝを以て些
細の事とせり、實ゟ些細の事ゟ似たりと雖、こを
を殺さんと思ふ心を、即些細の事にあらゞ、この
心、既ゟ慈悲を失ひたるなり、慈悲を失ひたる心、
漸長するに至らバ、畜類を殺ゝのみならゞ、
終ゟハ人を殺ゝの大惡ゟも陷るへし、豈恐きざ
るべけんや、
故ゟ殺生を誡むるハ、慈善の人となるべき階ゟ
して、終ゟハ、類ゟをあ、ふる善人ともなり、身の幸福
を得るゟ至るべし

小學讀本卷二終

明治十六年九月廿八日翻刻御届
同　年十月出版
翻刻人　福岡縣士族　山崎登
福岡區福岡橋口町四十番地